

小児科研修プログラム

病院名：千葉県こども病院

2023年6月30日 制定

1) 概要

プライマリーケアの大切な一部を占める、総合診療科としての小児科診療の基本を身に付ける事を目的とする。日本小児科学会研修実施要項案に基づくが、当院の現況に即したプログラムを以下に示す。

2) 研修目標

①小児の特性を学ぶ

- 子どもの成長・発達と異常に関する基本的知識を修得する。
- 子どもの心身の特性を知り、身体的状態だけでなく心理的状态を考慮した診療態度を身につける。
- 養育者の心配・育児不安などを受け止める。

小児は原則として家族内で生活しているため、家族との関係を良好に保ち、育児支援をふくめ、患児とその家族全体を考えて診療する。

②小児の診療の特性を学ぶ

- 子どもや養育者との信頼関係を構築し、訴えに充分耳を傾ける。
- 養育者からの情報を的確に収集できる。
- 養育者の情報と子どもの観察から病態を推察する『初期印象診断』の経験を蓄積する。
- 子どもの年齢と状態に応じた臨機応変な診療を行う。
- 診療に際して子どもの協力を得るためのスキルを身につける。
- 小児の薬用量、検査値などは成長とともに変化することを理解する。
- 小児の採血、血管確保、鎮静法などの基本的技能を修得する。

自ら症状を訴えず、診察に協力の得られにくい乳幼児の診療の特性を学ぶ。検査や画像に先行して重要な「初期印象診断」の経験を蓄積する。診察、処置時の固定、介助を経験する。体重、生理的成長に適した薬用量、検査正常値の知識を習得する。

③小児の疾患の特性を学ぶ

- 小児疾患は成人と同じ疾患でも病像が異なり、同じ主訴・症候でも年齢により鑑別疾患

が異なることを理解する。

- 年齢特性を理解した上で鑑別疾患を挙げ、子どもの病態に応じて問題解決する経験を蓄積する。
- 子ども特有の疾患，種々の先天異常を経験する。
- 頻度の高い疾患（感染症，けいれん，喘息など）については，診断・治療方法について習熟する。

年齢、発達段階により病態、頻度が異なる疾患につき理解する。一般的症状で始まっても重篤化する危険のある疾患を考えて対応する。先天性疾患、感染症、アレルギー疾患など小児に特徴的な疾患を学ぶ。

3) 経験目標

- ① 基本的手技；採血、皮下注射などは個人の経験、技術の程度に応じ、指導医のもとで行う。身体計測。口腔、皮膚、胸部、腹部他、身体所見の診察。全身状態、バイタルサインの把握。予防接種。乳児健診。

② 経験すべき症候

体重増加不良、哺乳力低下、発達の遅れ、発熱、脱水・浮腫、発疹、湿疹、横断、心雑音、チアノーゼ、貧血、紫斑・出血傾向、痙攣、意識障害、頭痛、咽頭痛・口内痛、耳痛、咳・喘鳴・呼吸困難、頸部腫瘤、リンパ節腫脹、鼻出血、便秘、下痢・血便、四肢の疼痛、夜尿・頻尿、肥満・痩せ

③ 経験すべき疾患：

新生児疾患	：低出生体重児、新生児黄疸
乳児疾患	：乳児湿疹、おむつかぶれ、乳児下痢症
感染症	：ウイルス感染症
アレルギー疾患	：気管支喘息、アトピー性皮膚炎
神経疾患	：てんかん、熱性けいれん
腎疾患	：尿路感染症

④ 経験することが望ましい疾患：

乳児疾患	：染色体異常症
感染症	：細菌性胃腸炎、伝染性膿痂疹
アレルギー疾患	：食物アレルギー
神経疾患	：髄膜炎、脳炎、脳症
腎疾患	：ネフローゼ症候群、急性腎炎、慢性腎炎

* 外来・救急外来・病棟業務・予防接種・乳児検診
などご記入下さい